

輪中地域における水防意識の変容に関する研究

岐阜大学 学生員 ○中嶋伸恵
岐阜大学 正会員 田中尚人
岐阜大学 正会員 秋山孝正

1. はじめに

濃尾平野を流れる木曽、揖斐、長良の三川では、古来より幾度も水害を引き起こし、その度に人々は治水事業に様々な知恵や技術を投入してきた。このような「地域性」を持つ特色ある景観や、人々の水防に対する意識には、堤防築造や道路敷設等のインフラストラクチャー整備が大きな影響を与えてきたといえる。

本研究では、堤防築造や水防活動等の治水に対する人々の働きかけに基づいた、この土地固有の景観が水防意識と共に変容してきた事象を解明する。

本研究では、岐阜県安八郡輪之内町を中心とする、長良川、揖斐川に挟まれた輪中地域を調査対象地とした。研究は基礎文献、史料、地図資料等のデータの分析と堤防、水防団、水防倉庫、水屋等に関する現地踏査及びヒアリング調査より成り立っている。

2. 輪中地域におけるインフラストラクチャー整備

本章では、明治期以降の調査対象地域におけるインフラストラクチャー整備を、地図や写真、歴史資料

文献などを用いて整理した。(表-1 参照)

(1) 治水事業の歴史

輪中地域の歴史は治水事業の歴史といっても過言ではない。洪水頻発地域において農業を基礎とした生活を送るために、主に治水事業の歴史を整理した。

研究対象地域において、近年最も被害の大きかった水害として9・12災害(1976年)がある。

(2) 道路整備事業の歴史

戦前は舟運や鉄道によって支えられてきた交通機能は、戦後の急激なモータリゼーションの発達を経て、道路ネットワークによってその大部分が支持されるようになった。輪中地域も例外ではなく、国道、県道などの主要道を始め、揖斐、長良川への架橋により輪中地域の人々やものの流れも増えた。

本節では、主に地図資料を用いて研究対象地域における道路敷設の概要を明らかにした。

(3) 切り割りの変遷

前節までを受け、堤防築造や道路敷設の歴史をもとに、堤防と道路の交差する地点に築造される切り割り(陸開)の歴史を明らかにした。切り割りの変遷を明

表-1 インフラストラクチャー整備史 (参考文献を基に筆者作成)

年代	水害	治水事業	切り割り	道路事業	社会
1887(M20)		木曽川下流改修(明治改修)		東海道線(大垣～岐阜)	
1891(M24)	大水害				濃尾地震
1893(M26)	大水害	三大洪水			
1896(M29)	大水害<>				
1899(M32)		木曽・長良川背割堤			
1900(M33)		長良・揖斐川背割堤			
1911(M44)		水制工			
1921(T10)	大水害	木曽川上流改修(大正改修)		養老鉄道(池野～養老)	臨時治水調査会
1929(S4)					第1犀川事件・世界大恐慌
1938(S13)					第2犀川事件
1945(S20)	大水害<>				枕崎台風・阿久根台風
1947(S22)				忠節橋(国道157号)	河川改修五箇年計画
1950(S25)	内水	支沢川改修打ち切り、中小河川改修事業			
1952(S27)	大水害		長良川第1・2陸開		ダイナ台風
1959(S34)	大水害<>	伊勢湾台風応急復旧工事		国道21号・22号・41号改良	台風7号・伊勢湾台風
1960(S35)	大水害<>		長良マイターゲート・長良陸開		治水事業十箇年開発計画
1961(S36)	大水害			モータリゼーション	第1次全国総合開発計画
1965(S40)	大水害				いざなぎ景気
1976(S51)	9・12災害	早川排水機場		南濃大橋(東道岐阜～南濃線)	高度経済成長期
1979(S54)	土石流	排水機場(19)	陸開(3)	海津橋・井ノ口橋	
1980(S55)			陸開(3)		
1981(S51)	土石流		陸開(4)		
1983(S53)			陸開(2)	新太田・立田・平野庄・油島大橋	架橋(18)
【凡例】 ——— 影響 ———> 継続 () 個数 <> 回数					

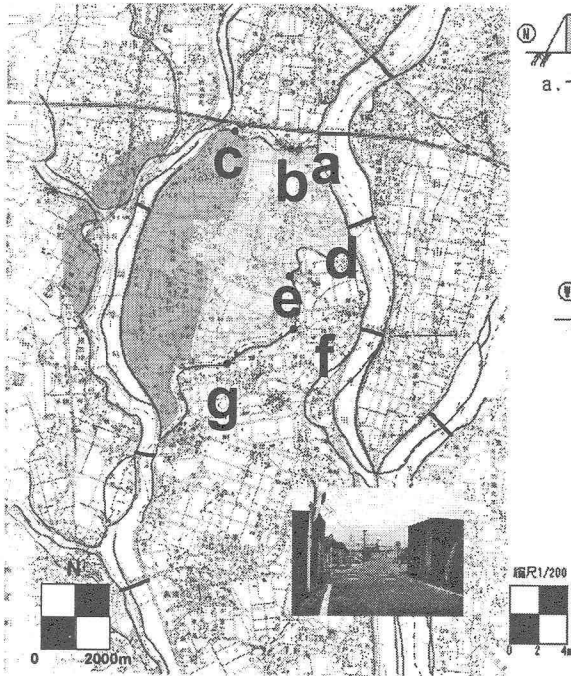


図-1 調査対象地図

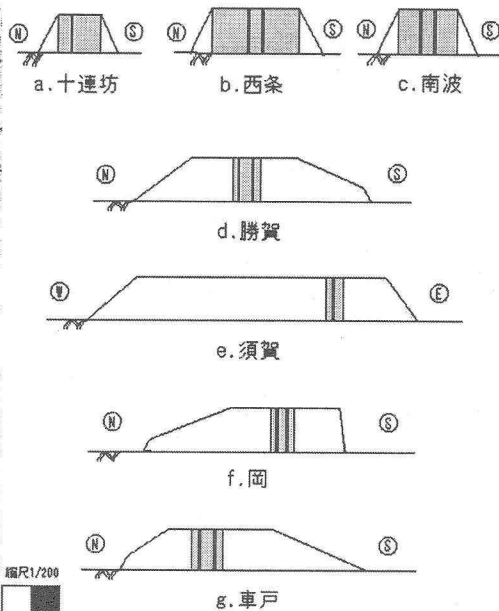


図-2 切割り断面比較図

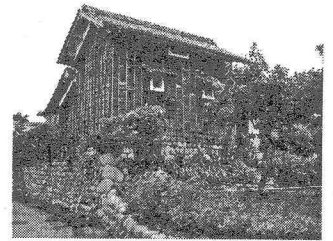


写真-1 水屋1



写真-2 水屋2

らかにすることにより、堤防と道路に表れた「治水」が「開発」か、という地域の目指す姿、当時の人々の考え方が明らかになると考えた。

3. 輪之内町における水防活動変容の分析

インフラストラクチャー整備により、輪之内町における水防活動や水防意識がどのように変容したのかを、現地踏査及びヒアリング調査により明らかにした。(図-1 参照)

(1) 水防活動の成り立ち

本節では、対象地域の現地踏査及び関連自治体に対するヒアリング調査を行い、輪之内町の水防活動の実態、及びその歴史的な変容を明らかにした。

地方自治体へのヒアリング調査より、近世からの治水に関する活動の体制、思想などが整理された。また、水防活動が大きく変容した契機として 9・12 水害時の「切割りの締め切り」とそれに伴う「治水の重要性の再認識」があったことが確認された。これらより、水防意識の時間的な変容に地域差が存在することが分かった。

(2) 切割りの位置づけ

輪之内町に現存する旧輪中堤は、道路敷設に伴い切り開かれ、切割りが築造されてきた。しかし、切割りは堤防の弱点になるため、水防意識に基づき様々な働きかけがなされてきた経緯があり、地域の人々にとって身近な水防活動の拠点となっている。

本節では、切割りの築造経緯、時期、形状等を明らかにすることにより、それらに現れた場所ごとの人々の水防意識の違い、つまり空間的な水防意識の地域差が存在することが分かった。(図-2 参照)

4. おわりに

さらに本研究対象地域である輪之内町において、伝統的なこの土地固有の景観が人々の水防意識と共に変容してきたことを検証するために、近年最も大きな被害だった 9・12 災害前後における水屋の基壇の高さに着目し、その変化を調査する。(写真-1, 写真-2 参照)

輪中地域において人々の水防意識は、インフラストラクチャー整備などの治水事業や人々の水防活動を支え、時空間的な地域差が存在し、景観などに現れるその土地固有の風土と密接に関連していることが分かった。

【参考文献】

- ・ 伊藤安男：変容する輪中，古今書院，1996.8
- ・ 木曾三川治水百年のあゆみ編集委員会：木曾三川治水百年のあゆみ，建設省中部地方整備局，pp.1098-1155,1995
- ・ 岐阜県史，通史編続現代，岐阜県，2003.3